

## 利尻山における携帯トイレブース設置にかかわる 問題点とこれからの課題

須間 豊(利尻富士町商工観光課商工観光係長)

利尻島は、北海道の最北端、稚内から西北 52km にあります。島の大きさは直径 15km、周囲 60km の円形をしており、その中央に 1,721m の利尻山がそびえる単一の火山島です。島の西半分が利尻町、東半分が利尻富士町で、島全体の面積は 183k m<sup>2</sup>です。

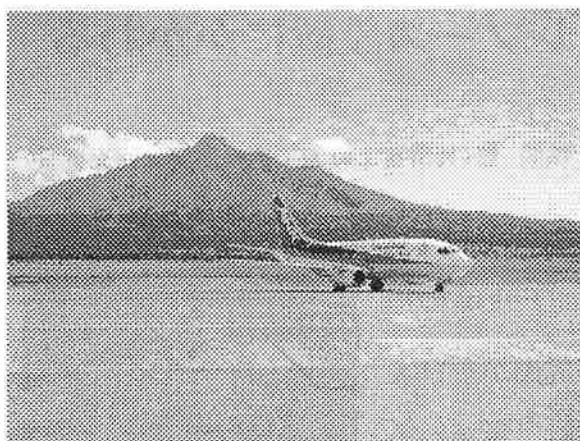


島内には 53km の周回道路と一部に自転車道路が海岸沿いに整備されていて、変化に富んだ海岸線や利尻山の風景を楽しむことができます。

気象は沿岸一帯を流れる対馬暖流によって受ける影響が極めて大きく、温暖で四季を通じての最高気温は 29 度、最低でも零下 15 度以下になることは極

めてまれで、夏は涼しく冬は積雪も少なく恵まれてはいますが、季節風が他地域にみられないほど強く、典型的な北方離島特有の自然条件下にあります。

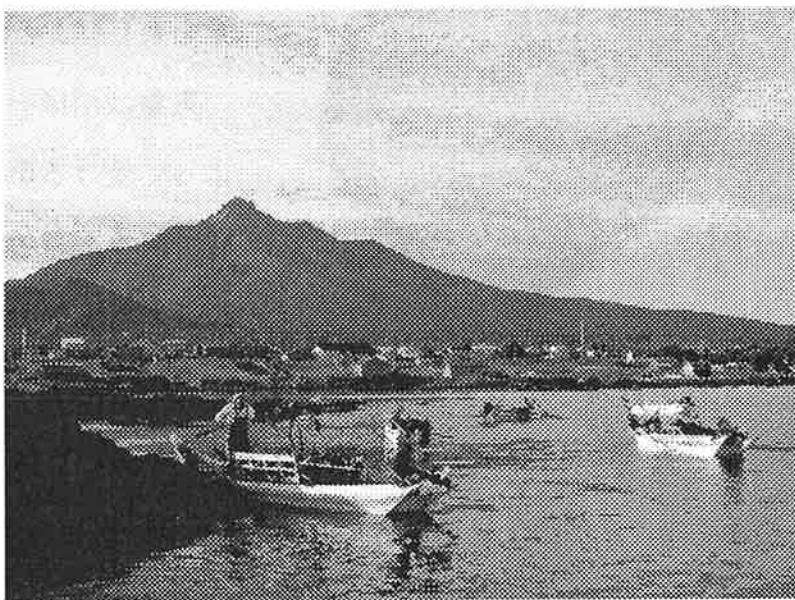
交通手段である海上交通は 3,200 t 型フェリーが稚内港と 1 時間 40 分で結ばれており、5 月～9 月の観光シーズンには 1 日 4 往復、10 月～12 月には 3 往復、1 月～2 月には 2 往復と初就航時に比べるとかなり利便性が図られ、住民の足はもとより観光客や自動車・生活物資輸送など島民の生活路線として重要な役割を果たしています。また、礼文島との航路も夏期間には 2 往復され、稚内～鴛泊～香深と三角航路で運航されるなど、離島と本土の海上ネットワークとして観光産業に貢献しています。



次に航空路線は、滑走路 1,800m 及び新ターミナルビルが平成 11 年 6 月 1 日に完成し、これに伴い千歳～利尻間に B737-500 ジェット機が就航され、夏季間は利尻～稚内間のツインオッター機とあわせ 1 日 3 便就航しており、

観光客や島民に利用され、本土への時間短縮が図られています。さらに近年には、関西空港との直行チャーター便が観光シーズンに数便就航するなど観光の空の足としてまた、地域経済の活性化として重要な役割を果たしています。

利尻島の主産業は水産業であり、利尻島周辺海域は古くから好漁場として賑わい、ウニ・コンブ・カレイ・タコ等が主な資源となっていました。200 海里水域設定後は漁場の狭隘化に伴い回遊性魚族の水揚げが減少し、沿岸においても磯焼け現象に代表される自然環境や海況の変化に大きく左右され、コンブ・ウニ・アワビ等特産的な資源の安定生産が確保できない状況にあります。



これと平行し、近年における輸入品の市場流入や景気動向の変化によって、生産価格が低迷を続け、更には水揚げから加工、流通に至る衛生管理、品質管理が要求され、これに離島本土間における生産資材、輸送費等のコスト上昇により漁家経営は一段と苦しい状況にあります。

#### 第4回「山のトイレを考えるフォーラム」～個から全体を見る山のトイレ問題～

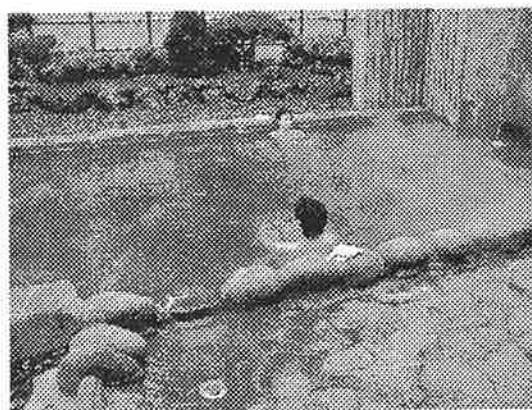
こうした中、加工技術の発展により、これまで成しえなかったウニの冷凍技術が確立され、長期保存による周年供給や鮮魚類の新鮮保存など生産ルートの拡大や地域内供給による観光産業への寄与など産業振興の新たな手法として期待される所です。

しかし、漁業従事者の高齢化と若年層の都市への流出などから、後継者が不足するなど離島特有の産業課題は依然として続いており、今後の基幹水産業の確立を図るためには、資源の増養殖など栽培漁業の推進や観光・レクリエーション産業との有機的結合、海とのふれあいや景観に配慮した漁村空間の整備も重要と思われ、これに基づく若年層の定住対策や高齢者の知識と経験を活用した施策の展開も図らなければなりません。

次に観光産業ですが、近年のライフスタイルの変化から余暇活動への関心が高まり、観光ニーズは量的に拡大するとともに、自然・アウトドア志向やファミリーレジャー志向など旅行形態や目的も多様化し質的に大きく変化しています。

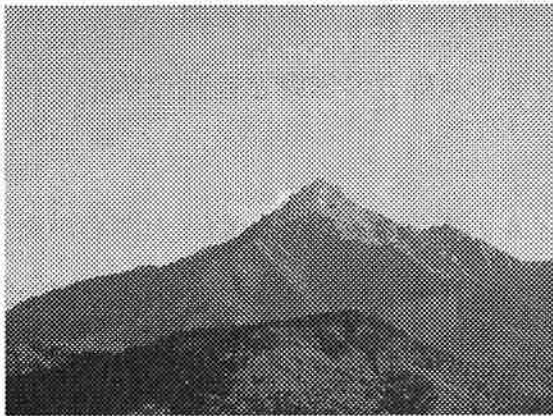
このような状況の中、利尻島は「利尻・礼文サロベツ国立公園」に指定されており、優れた自然環境と新鮮な海の幸、日本百選に選定された名山・名水・森林浴の観光資源に恵まれ、社会経済が変化する中でも訪れる観光客は年々増加傾向にあります。

観光関連産業は、自然環境の保全を重視しつつも、観光資源や民間による宿泊施設の整備、フェリーの大型化や空港の拡張など交通アクセスの整備が進み、また新たな観光資源として温泉施設の整備や加工技術による地場産品の食材提供など今後も離島ブームにのった増加に期待する所です。



#### 第4回「山のトイレを考えるフォーラム」～個から全体を見る山のトイレ問題～

しかし、最盛期には宿泊施設等の不足から宿泊客を受入できない状況が生じるなど今後は受入施設の充実を考慮した施策を講じるとともに、これら利尻島の特色を活かした体験型観光の整備や魅力あるイベントの開催、親切で細やかなサービスの提供などホスピタリティの一層の向上を図るほか、冬季観光開発のための観光メニューの整備、効果的なPR戦略に基づく積極的なプロモーション活動の展開とITを活用した観光情報の発信などニーズにあった離島という癒しの観光地づくりを推進しなければなりません。



利尻島の地形は、利尻山を中心として四方にゆるやかに裾野をひく火山島です。利尻山は標高300～400mを境にして、その上と下では著しく様子が違っていています。上部では利尻火山の本体そのものの山肌が露出し、荒々しい岩がそびえ立っていますが、下部は火山の噴出物に厚くおおわれてゆるやかなすそ野となっています。

利尻島は約1,000万年前の新第三紀中新世を基盤とする地層の上になりたっています。この基盤層は島の北部のペシ岬やポンモシリ島・駕泊ポン山などで見ることができます。ポンモシリ島対岸の基盤層には二枚貝、魚骨、珪藻（けいそう）などの化石を含む堆積層があります。

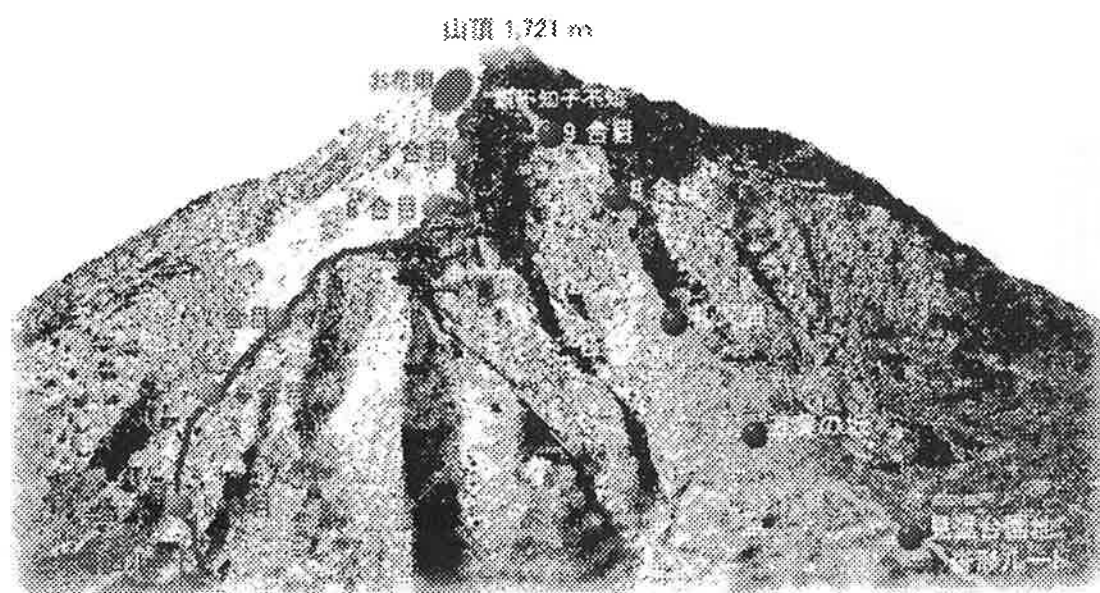
利尻山は海底火山から成長したのではなく、もともとあった島の上に形成されたものです。約100万年前の第四期更新世から約1万年前の完新世にわたる十数回の火山活動によりできた成層火山です。生成当時の火口跡は失われていますが、頂上付近のローソク岩などから見て現在の最高点のやや南側に中央火口があったと考えられます。

#### 第4回「山のトイレを考えるフォーラム」～個から全体を見る山のトイレ問題～

基盤層を貫いてできた利尻火山の噴出物は、北海道北部に広く分布しています。約1万年前の完新世初期と考えられる火山噴出物は、日本海沿岸では稚内市抜海から遠別町あたりまで、オホーツク海沿岸では猿払村から雄武町にかけて見られます。

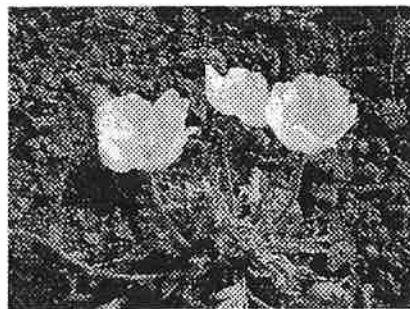
利尻島の南東、北西側にはポン山と呼ばれる小さな山を数多く見ることができます。これは成層火山の形成後、約2万年前のウルム氷期から始まった寄生火山活動によりできたものです。ポン山は頂上部に小さな火口跡を残す円錐形をしています。

利尻山の登山コースは鴛泊コース、杓形コースの2つあり、鴛泊コースは初心者向けの最もポピュラーな登山コースで、鴛泊市街から約3kmにある登山口の3合目利尻北麓野営場までは車で行くことができ、そこから歩いて10分ほど上に日本名水百選にあげられている甘露泉水があります。頂上まで8.4km、3合目の登山口から登り約6時間、下り約4時間を要し、5合目まではトドマツ・エゾマツの原生林を通る単調な登りですが、6合目から8合目の長官山あたりまでが最も急で周囲をダケカンバ・ミヤマハンノキ・ハイマツの低木林が続きます。



#### 第4回「山のトイレを考えるフォーラム」～個から全体を見る山のトイレ問題～

長官山から10分程度上に避難小屋があり、その後頂上まで尾根沿いに登り、ガレ場で足場が悪いところもありますが、リシリヒナゲシ、ボタンキンバイ、リシリブシ、ハクサンイチゲなどの高山植物が咲き乱れ、すばらしい展望が開けます。



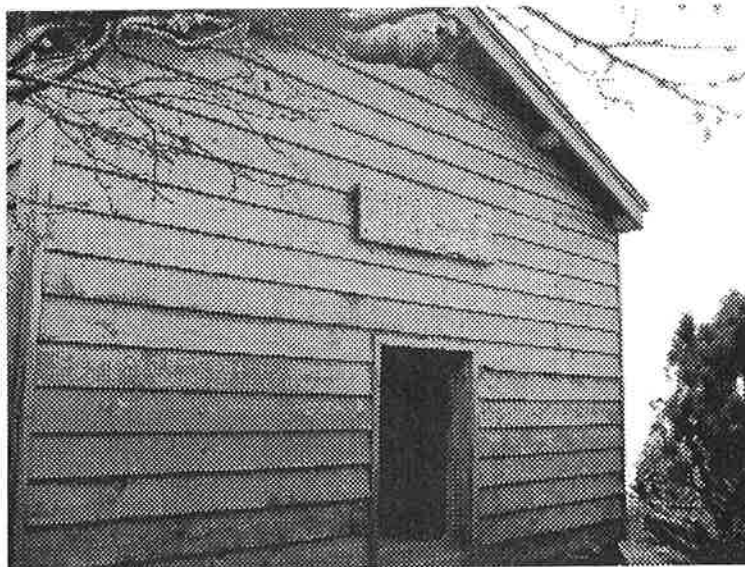
杓形コースは中級者向けで杓形市街から約5kmにある登山口の5合目見返台園地までは車で行くことができます。頂上まで9.2km、5合目の登山口から登り約5時間、下り約3時間を要し、7合目手前の避難小屋まではダケカンバ・ハイマツ帯を通ります。ここから先は頂上まで急な登りとなり、夜明かしの坂、馬の背と登っていくと目の前に頂上を望む三眺山に着きます。ここからは、高度差500mの道内最大の西壁、サメの歯のようにとがった岩峰が連続する南稜など1万年前からの侵食、崩壊のドラマを目の当たりに見ることができ、足元にはお花畑が広がります。この先鴛泊コースとの合流点までには危険なガレ場が続き、落石に注意しながら安全を確認して一人ずつ横断しなくてはなりません。また、9合目の鴛泊コースと杓形コースの合流点は周りに木はなく、登山道は火山灰と小石の小さな崖を登らなくてはならないことから、大変滑りやすいので注意が必要です。



南峰は利尻山の最高峰ですが、頂上は急斜面で大変危険なため、現在は三角点のある北峰を山頂としています。また山頂は狭く、周囲は急傾斜で落ち込む深い谷になっているため、登山コース以外は立ち入りを禁止しています。

山頂には小さな社（やしろ）があり、ここからは島内全域と紺碧の海に浮かぶ礼文島、晴れた日には大雪山やサハリンも望むことができます。

鴛泊、杓形の両コースにある避難小屋にはトイレ、水などの施設や備品はありません。利用も緊急時に限っているので避難小屋で泊まる登山計画は立てないようにお知らせしています。

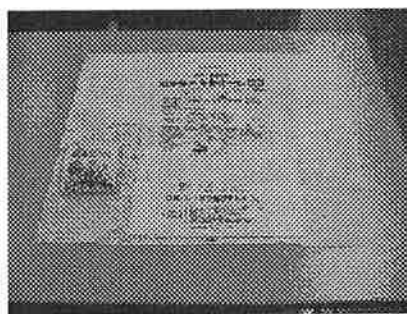


利尻山の気象は離島のため内陸部とは異なった気象条件です。5～6月頃までは天気の良い穏やかな日が続きますが、気温は10度前後で5月の山頂付近にはまだ深い雪があります。観光シーズンの7～8月は気温が20度前後となりますが、天候が目まぐるしく変わります。霧も発生しやすく、風のある日の山頂付近は寒いほどの体感気温となります。9月の気温は15度前後で紅葉が始まり、利尻山は錦絵を思わせるすばらしい景観となります。10月の気温は10度前後と朝晩はかなり冷え込みます。この時期の登山は冬山並みの装備と準備が必要で、下旬からは初雪が見られ、美しい雪化粧の利尻山となります。11月以降は利尻山も雪に覆われ、日本アルプス並みの険しい山に変貌します。避難小屋も雪で屋根まで覆われ、冬山登山の経験を十分に積んだ登山者でなくては容易には登ることはできません。

利尻島は野鳥の種類は豊富ですが哺乳類の種類は少なく、シマリスやイタチを見かける程度です。クマやヘビは生息していませんので、安心して登山ができます。しかしながら近年の登山ブームにより名山利尻富士を登覇する登山客が年々増加しており、平成14年度の登山者は約10,000人でそれに伴う糞尿排泄物やごみ問題、登山道の崩壊と課題が山積しています。

#### 第4回「山のトイレを考えるフォーラム」～個から全体を見る山のトイレ問題～

糞尿排泄物の対策として携帯トイレと水溶性ティッシュ 10,000 セットの無料配布を平成 12 年度より各宿泊施設、観光案内所、警察官駐在所、北麓野営場において実施しており、登山口に設置



している回収ボックスの回収率は平成 12、13 年度で約 6%の 600 個でしたが、平成 14 年度は約 13%の 1,300 個の回収率となっています。平成 14 年度の回収率の増加の要因として、携帯トイレブースの設置が功を奏していると思われます。

携帯トイレブースの設置経緯ですが、利尻礼文サロベツ国立公園の保護及び整備発展を目的として稚内市、豊富町、幌延町、礼文町、利尻町、利尻富士町、宗谷・留萌支庁、環境省稚内自然保護官事務所、宗谷・留萌森林管理所で構成する利尻礼文サロベツ国立公園連絡協議会が昭和 51 年に発足されており、平成 12 年度の会議の中で、利尻山の自然環境保護が議題にあがり、対策として携帯トイレブースの試験的設置が平成 13 年度の事業計画に盛り込まれ、平成 13 年度に鴛泊、杓形両コースの避難小屋脇に便座付テント式ブース 2 基を設置し、14 年度にはその 2 つのほかに鴛泊コース 5 合目にテント式ブース 1 基、6 合目、9 合目に樹脂製ブース 2 基を設置し、現在は計 5 基のブースが設置されています。なお、杓形コースの避難小屋脇のブースはこの時にテント式ブースから樹脂製ブースへ変更しています。





#### 第4回「山のトイレを考えるフォーラム」～個から全体を見る山のトイレ問題～

ただ、テント式ブースは積雪前の9月下旬には撤去しなくてはならず、強風等においてたびたび破損し、修理や取替を余儀なくされていることから、平成15年度には樹脂製ブースに変更する予定です。

また、使用頻度の多さや誤った使用方法によるブース内の汚れについては、使用方法のPRはもとより、ブース内の清掃を月1度程度、利尻礼文サロベツ国立公園パークボランティアの会や町、森林管理署、警察署が協力し合いながら行っています。

設置経費ですがテント式ブースは1基3万円で、人力による設置作業となりますが、樹脂製ブースは1基23万円で設置にはヘリコプターを使用しました。



ヘリコプターの運搬経費は1基あたり100万円程度かかりますが、昨年はヘリコプターの遊覧飛行事業が利尻町で行われたことから、それにあわせて運搬したため1基8万円の少額経費で済んでいます。

来年度の樹脂製ブースは人力で運搬できるように組み立て式を考えており、現在製作者と打ち合わせ中です。

携帯トイレと水溶性ティッシュの購入価格は、携帯トイレが1枚130円、水溶性ティッシュが2個24円の合計154円で年間10,000セットの購入経費は税込みで1,617,000円を要し、また未使用の返却があまり見られないことから有料化を現在検討しています。

今年度実施した登山客へのアンケート調査では約100人の登山客から回答をいただき、そのうち約77%の人が100円程度で購入しても良いという回答を得ていることから、金額の設定、自動販売機等による販売などについて検討していく予定です。

#### 第4回「山のトイレを考えるフォーラム」～個から全体を見る山のトイレ問題～

携帯トイレの啓蒙については、利尻島のパンフレットや登山ガイドへの掲載、フェリーの船内放送、配布場所でのPR、各旅行エージェントへの協力要請を行っており、年々浸透されてきているように思われます。

また来年度は、町、森林管理署、道、警察署、山岳救助隊、観光協会、宿泊業組合、愛山グループ等のメンバーによって構成する利尻山登山環境整備対策連絡協議会が発足されることになり、利尻山の環境整備及び維持管理のあり方を検討し、安全で快適な登山ができるように関係機関相互の情報交換や連携を図り、日本名山百選である利尻山を守っていかなくてはならないと考えています。